ボードインの持帰った日本の美術品六〇〇点と日本の写真（一八六二―七〇）一三〇枚

○石田純郎[1]・H・ボイケルス[2]
H・E・ヘンケス[3]

幕末維新の医学に大きな影響を与えたA・F・ボードインは一八六二年に長崎に来日、その後大阪、東京の医学校で教え、一八七〇年に日本を去ったといわれる。彼の弟のA・J・ボードインも一八五八年に長崎に来日、オランダ貿易会社代理人、オランダ領事を兼任し、兄A・F・ボードインとほぼ同じ頃に神戸、東京に転任し、兄の数年後に帰国した。

この二人がオランダへ持ち帰っていた日本の美術品の目録と幕末維新の日本の写真を最近オランダで発見したので報告する。

ライデン民族学博物館図書館で、日本美術品目録を見つけた。一八九一年にボードイン兄弟により出版された。このコレクションは、同博物館に一時寄託されていたが、大多数は再び持主に返され散逸したようである。数点が最近まで同博物館に保存されていたが、持主（ボードインの子孫）の離婚騒動のため返却され、現在実物の調査は不可能の状態である。

目録によると美術品の総数は五七七点、ほとんど日本の古美術であるが、例外的に少数の中国・シャム等の品も含まれている。美術品の詳細を目録に従って見ると、金属（上薬を塗った物、青銅、花瓶、金だらい等）三二点、象牙（群像、根付、小立像）一〇六点、うるしを塗った色々な箱一六八点、木・寄木細工二二点、楽器四点、陶磁器（薩摩焼、九谷焼、京都焼、伊万里焼、肥前焼、平戸焼等）一五〇点、（この中には高さ二m四五cmの石灯籠を含む。）織物一三点、屏風、掛物二二点、その他二九点、貨幣（大判、小判、銀銭、銅銭）二〇点、貝一点。

医療器具はなく、純美術品のみである。カタログに添えられた写真を供覧する予定である。

ボードインの子孫の家で幕末維新の写真一二七枚を見つ

けた。この中には二枚以上で構成されたパノラマ写真が一〇枚含まれているため、写真の総枚数は約一五〇枚となる。この内二〇枚弱が他の写真コレクションの一部としてすでに日本で発表されているにすぎず、他の写真は未発表である。

この内で年代の確認されたもっとも古い写真は、一八六二年の長崎のポンペ、もっとも新しい写真は一八七〇年のボードイン離日の写真である。大多数は一八六四年前後のものと思われる。鎌倉英人殺害事件（一八六四）、長州戦争（一八六四）の写真が含まれ、またアンベール幕末日本図絵（一八六三―六四の滞日記録、一八六八に発行）に使われている絵とまったく同じ写真、酷似した写真が一三枚含まれており、またイラストレイテッド・ロンドン・ニュース（一八六四年一一月一二日および一二月二四日号）に使われている絵と同じ二枚の写真が含まれている。

写真の作者は、作風、既発表の写真より判断して、ベアト作が過半数と考えられるが、その他にロッシュ、上野彦馬系の写真もあると推定される。また写真家に個人的に撮らせた写真は少数で、大半は写真店で既成品として売り出された写真を買い求めたものと考えられる。

写真を分類すると、ボードイン兄弟および医師たち一三枚、風俗一五枚、人物一二枚、一八六六の和洋折衷のお飾り一枚、長崎二七枚、下関六枚、神戸一枚、大阪一枚、鎌倉一三枚、横浜一八枚、江戸一一枚、不明の場所一九枚。

主要な写真としては、グラバー邸の庭のポンペを含むオランダ人五名と日本人武士四名・神社の前の日本人医師集団・オランダ人と芸者達（二枚）・脈をとる医者・松本良順・中原猶介（一八三二―一八六八）・ファン・ポルスブルック（駐日オランダ外交代表）・出島（二枚）・長崎飽の浦日本人工場（二枚）・長崎居留地と大浦天守堂（一八六五竣工）・長崎港（多数）・下関漁港（二枚）・長州戦争（四枚）・神戸和田岬砲台・鎌倉英人殺害事件の犯人清水清次のさらし首・横浜外人墓地（数枚）・横浜漁村（二枚）・横浜弁天（二枚）・横浜居留地建物（二枚）・江戸島津屋敷（一八六八焼失）（数枚）・有馬邸・永代橋・東禅寺イギリス大使館・済海寺フランス大使館・長応寺オランダ領事館等。

美術品のコレクションの大部分が散逸したとはいえ、これらの美術品および写真のコレクションは、単に幕末維新

の医学史のみならず、社会史、産業史、風俗史、美術史、写真史等にとっても極めて貴重な資料と考えられる。

(1)三菱水島病院医師　2)ライデン大学医史学準教授　3)ロッテルダム大学眼科前教授)

宮城県蔵王町平沢の「だるま堂」について

玉手英典

表題の「だるま堂」は古くより宮城県南地方の安産信仰の祠として有名であったが、明治初年五十嵐汶水なる産科医によって再建されたものである。場所は蔵王山の山間部にあり、長暦二年(一〇三八)に建立された安養寺境内の杉の古木が現存しているがその根元に所在する。堂には丸い自然石と汶水が彫った石の達摩像が安置されている。そしてその裏山の小高い所にも中央に死をうがった石碑と「愚鈍奄」と書いた墓石があり、これらが安産を祈る妊産婦や一般女性の信仰の対象となっている。

汶水およびその著書である「安産仙翁邦言教喩(おぼこなしだるまのなまりおつげ)」については先年二回にわたって本会にて報告したところであるが、今回はこの堂祠についての調査を報告し、併せて前記著書の復刻印刷が完成したのでこれを展示したい。

(仙台医学史研究会会長)